

伝記資料における李通玄のイメージ

伊藤 真

〔抄録〕

中国・唐代に生き、独自の華嚴思想を築いた華嚴行者・李通玄居士は、僧伝などさまざまな伝記資料の中にその事績が描かれ、近世に至るまで語り継がれてきた。従来、そうした伝記資料から李通玄の生涯に関する史実を抽出しようとする研究がなされてきた。しかし各種伝記資料の内容は、口から光を放ち、天女の給仕を受けるなど、伝説的・神異的な逸話に満ちている。そこにどのような意味があるのか、本論ではそれを探る。種々の逸話を見ていくと、釈尊や維摩詰にも似た高貴な仏教者のイメージがやがて神仙

的なものとなり、虎を手なづけ、端坐したまま亡くなるといった逸話が脈々と継承されるなど、神異の禪者とも言うべきイメージも定着していった。その背後には中国の社会的・時代的变化があったが、同時に、習禪の華嚴行者、中国固有思想に通じた居士など、多彩な逸話を生むような多面性を李通玄自身が持っていたことも想像できるのである。

キーワード 李通玄 伝記 華嚴

はじめに

華嚴思想を宣揚した李通玄居士（七世紀半ば〜八世紀前半^①）は、法蔵の影響を受け、澄観に影響を与えているためにその生存年代が推定できるが、詳しい事績は不明である。ただし僧伝など、李通玄の伝記的事項を記した後世の資料（伝記資料）は数多く知られている。中国

の多くの僧伝の例に漏れず、それらには神異譚、靈驗譚の類も多いが、その中から史実の解明を試みた先行研究もある。本論では史実の確定は先行研究に譲り、むしろ伝記資料に見える伝奇的な逸話に着目する。後世の人々が李通玄にどのようなイメージを抱いていたのか、そしてその背後にどのような時代的、社会・文化的な事情があったかを検討し、さらにそこから逆に李通玄の人物像も想像してみたい^②。

資料 1：伝記資料

資料名	撰者	成立年	テキスト	備考
1 華嚴經決疑論序	比丘照明	770	大正36	
2 李長者事迹	雲居散人馬支	800頃か	新纂統蔵4	
3 華嚴經合論序 (志寧)	志寧	847-860	新纂統蔵4	
4 神福山寺靈跡記	王居仁	907	山右石刻叢編9	
5 華嚴經合論序 (慧研)	慧研	967	新纂統蔵4	
6 宋高僧伝 卷22	贊寧	988	大正50	
7 決疑論後記	張商英	1088頃	大正36	撰述年代：大正36の戊申を戊辰(1088)に訂正
8 李長者行蹟記	宗勝	1102	山右石刻叢編16	『金石統編』巻17所載の同文あり
9 李長者行蹟記B	〃	〃	四庫全書547巻	山西通志巻160平定州所収
10 李長者論記	張商英	1118	山右石刻叢編17	
11 隆興仏教編年通論 巻16	祖秀	1164	新纂統蔵75	
12 歴代編年釈氏通鑑 巻9	釋本覺	13世紀末以降	新纂統蔵76	
13 嘉泰普燈錄 巻24	正受	1201	新纂統蔵79	
14 李通玄長者行状	—	1207以前	熙宗3年以前	知訥『華嚴論節要』末尾に所載
15 仏祖統紀 巻40	志磐	1258-69	宝祐6-咸淳5年	大正49
16 仏祖歴代通載 巻13	念常	1341	至正元年	大正49
17 釈氏稽古略 巻3	寬岸	1354	至正14年	大正49
18 仏法金湯篇 巻8	心泰	1386	洪武19年	新纂統蔵76
19 神僧伝 巻7	—	明初 (1417頃)	永樂15年以前	大正50
20 華嚴合論纂要後序	方沢	1567	隆慶元年	新纂統蔵5
21 華嚴經合論簡要序	李贄 (李卓吾)	1592.3頃か	万曆20-21年頃か	新纂統蔵4
22 華嚴經感心略記	雲棲株宏	1571以降か	隆慶5年以降か	新纂統蔵77
23 李長者見聖授道伝	—	1596頃か	万曆24年頃か	中国佛寺志叢刊9
24 三教源流搜神大全 巻6	—	16-17世紀か	明末	内閣文庫本
25 居士分燈録 巻上	朱時恩	1632	崇禎5年	新纂統蔵86
26 仏祖綱目 巻31	朱時恩	1634	崇禎7年	新纂統蔵84
27 華嚴經持驗記	周克復	1660頃	順治17年頃	新纂統蔵77
28 居士伝 巻15	彭際清	1770-1775	乾隆35-40年	新纂統蔵88
29 寿陽縣志 巻12所収の伝	—	1882	光緒8年	寿陽縣志巻12
30 寿陽縣志 巻13所収の伝	—	1882	光緒8年	寿陽縣志巻13
31 華嚴經感心縁起伝	弘璧	1889	光緒15年	新纂統蔵77

一、李通玄の伝記資料と先行研究

まず、主な先行研究を概観する。その多くは伝記資料の分析から史実を掘り起こし、李通玄の生涯の再構成を試みたものである（伝記資料の年代や出典等は「資料1 伝記資料」参照）。

- ① 湯次了榮氏の研究——主として『積大方広仏華嚴經論主李長者事迹』（以下、『事迹』と略記）と『決疑論後記』と思われる資料を中心に、『華嚴經決疑論序』（以下、『決疑論序』と略記）『華嚴經持驗記』『宋高僧伝』『仏祖統記』なども参照しながら李通玄の生涯の概略をたどるが、資料批判をしていない^③。
- ② 高峯了州氏の研究——『李通玄長者行状』『事迹』『宋高僧伝』などを比較検討し、諸資料記載の生没年、年寿、出自等に異同が多く、確定できないとしている^④。
- ③ 稲岡智賢氏の研究——公刊されているなかでは最もまとまった論考。最も成立の早い『決疑論序』と『事迹』を根本資料としつつ、唐代から清代に至る二七種の伝記資料を比較検討し、生存年時は六三五〜七五七年頃までの間としか決定できないとする^⑤。
- ④ 木村清孝氏の研究——『決疑論序』を最も信憑性の高い資料とし、さらに『事迹』『宋高僧伝』『決疑論後記』がそれに次ぐとする。李通玄の著作に密教との関連が薄いことから、生没年を『宋高僧伝』の貞観九（六三五）〜開元一八（七三〇）年としている^⑥。

⑤ 邱高興氏の研究——木村氏と同じく『決疑論序』と『宋高僧伝』を重視し、同じ生没年を主張する。ただし清代成立の『居士伝』を利用するなど、資料の扱いに疑問が残る^⑦。

⑥ 小島岱山氏の研究——三一点の伝記資料と地方志等に出る断片的資料なども検討。李通玄の事績に加え、資料に記された有縁の地の特定なども含め、主として史実を析出し、詳論している。また、高麗の知訥撰述『華嚴論節要』末尾に採録の『李通玄長者行状』を八世紀末の成立と推定し、『事迹』の土台となった重要な二次資料だとしている^⑧。

⑦ 洪梅珍氏の研究——最新の研究成果。各種伝記資料に見られる異説は、『決疑論序』と『事迹』に淵源すると指摘。前者は李通玄の生涯を知るために最適な資料、伝説的な逸話が豊富な後者は、民間信仰や居士仏教の中で李通玄の地位と価値を高めた^⑨と評価する。

二、『決疑論序』と『李長者事迹』に描かれた李通玄像

本論では伝記資料として、稲岡智賢氏、小島岱山氏、洪梅珍氏の論考で言及されている資料の内、筆者が披見し得た限りの二八種と、荒木見悟氏が言及する『三教源流搜神大全』一点^⑩、さらに稲岡・小島両氏も挙げている『李長者行蹟記』を後世に転載した『山西通志平定州』所収の伝と、内容的には短く新味はないがこれまで言及されていない『歴代編年釈氏通鑑』を加え、三一点の資料を検討する^⑪。撰者・編者、成立年代、出典などをできるだけ挙げて一覧とした（資料1 参

照。成立年代については稲岡氏、木村氏等の先行研究も参照した)。

李通玄の伝記資料としては、彼が生きた時代に最も近い『決疑論序』(七七〇年成立)と『事迹』(八〇〇年代初頭成立か)が重視されてきた。前者は李通玄の弟子だという比丘照明がのちに『決疑論』に付した序文である。一方、『事迹』は雲居散人馬支なる者によるが、兩人ともいかなる人物だったかは不明である。また、この二種の伝記で、後代の伝記資料に見られる逸話が一部を除いてほぼ網羅されている。この点は洪氏の指摘のとおりである。したがってまずこの二点の伝記資料を基本資料として、その内容を確認しておく。¹²⁾

・〔決疑論序〕

洪氏も指摘するように、『決疑論序』の記述は一見いたって簡潔に李通玄の事績を記述しているような筆致である。だがそこには史実と推定し得る事柄だけではなく、比丘照明が李通玄に対して抱いていたイメージをうかがわせる記述もある(全文は注に掲げる)。¹³⁾

まず李通玄は「智慧明簡」にして「学は常の師に非ず」「情を易道に留め、妙にして精微を尽くす」(極めて学識が高く「周易」に精通していた)という。そして「林泉に放曠し、城市より遠ざかる」(都會を厭い山林に遊ぶ)というから、中国の古典的な脱俗の賢者のイメージである。

その李通玄は「年四十を過ぎて外書を覧ることを絶ち」もつばら華嚴経の研究に没頭したとされるが、その様子は「惟ふに西域浄名遍行是れ其の流なり。此方の孔老は其の類に非ず」と、同じ賢者でも孔老

ではなく維摩詰に喩えられている。比丘照明は李通玄に、仏法の奥義に達した天竺の在俗の智者の姿を見ていたようである。一方、「實に日に王孫たり。國を捨つることを同じくす」と言うのは釈尊を思い浮かべてのことだろう。この資料では例外的に怪異な現象が描かれる臨終の場面でも、「山林震驚し、群鳥乱鳴、百獸奔走」「道俗哀嗟せざる無し」と、釈尊の入滅の場面を思わせる。¹⁴⁾ 照明は「夫れ聖人の世を去るなり」と言う。さらにはまた、「影響の文殊、普賢の幻有なり」(根本智を象徴する文殊菩薩と差別智を象徴する普賢菩薩の化身にも似る)と、華嚴経の菩薩のイメージも語られる。こうしたどこかエキゾチックですらあるイメージは、『事迹』が伝える人物像とは大きく異なるものである。

・〔李長者事迹〕¹⁵⁾

この資料は李通玄を「李長者」と呼び、その出自は不明だが滄州の人とする。李通玄は太原孟縣の高氏の館で執筆に励むこと三年、馬氏なる人物の古仏堂辺の土室に移ると十年間「端居冥黙」したのち韓氏別業なるところへ移ったという。さらに華嚴経の釈論執筆にふさわしい場所を求めて出立すると、一頭の虎の案内で神福山の土龕へ至る。そこで『新論』等を執筆するのだが、嵐の夜に倒れた松の根元から泉が出現し、絶世の美女二人が現れて給仕し、李通玄は口から白い光を放って灯明の代わりとしたという。やがて死期をさとした李通玄は村人に別れを告げ、臨終の場面では種々の奇瑞や神異な現象が起きる。『決疑論序』に比べ、『事迹』は李通玄の生涯を豊富な逸話でたどる

が、一見して靈驗・神異譚の類が多いことに気づく。ここで李通玄のイメージと関連する記述をさらに何点か確認しておきたい。

まず、風貌は「身長七尺二寸、広眉朗目：修臂円直：毛端右旋：風姿特異、殊妙之相の具足せざることなし」とされ、毎日棗十粒と柏葉餅一枚のみを食したという。棗の話は後に多くの伝記資料に見え、『仏祖統記』をはじめ、多くが「棗柏大士」と呼ばれたことを記す¹⁶⁾。

一方、容貌の描写にはすでに歴史的人物としての釈尊のイメージはなく、超人的な相好を具えた仏にも比すべき姿である。しかし同時に、樺皮の冠と簡素な衣に裸足で歩き、粗食に甘んじたことと併せ、どこか仙人めいた飄然たる様である。こうした風姿は高僧伝の類にしぼしば見られ、『決疑論序』に比べて、ある種パターン化された描写になつていえると言えらう。

また、死後に村人たちが埋葬した際には「飛走の悲鳴山に滿つ」と、鳥獸が悲嘆したことは『決疑論序』の臨終の場面に通じるが、「二白鶴」が「哀唳」し「二鹿」が「相ひ叫ぶことしきり」だったとする。鶴林（沙羅双樹）、鹿苑など、鶴や鹿には釈尊の伝記に通じる面もあるが、中国では鶴が仙人の乗り物であり、鹿も仙人と共に図像等に登場するなど、神仙に関わりが深い動物であることに注目したい。一方、李通玄が土室に「端居冥黙」すること十年という逸話からは、李通玄在世時から活躍し始めていたと思われる禅者たちの姿も思い浮かぶ。このように『事迹』では全般的に①神仙的なイメージと②神異の禅僧的なイメージが打ち出されていると言えよう¹⁷⁾。

洪梅珍氏は、『事迹』は李通玄の神異性およびその著作の価値と、

大衆による信仰と思慕とを高め、李通玄の宗教的地位を華嚴宗の祖師たちに匹敵せしめているという¹⁸⁾。しかし、『事迹』の神異的な逸話の数々と、それらが後代に継承されたことが果たした役割は、単に華嚴の徒としての李通玄の顕彰や、華嚴思想の宣揚に留まるものではない。次節では各伝記資料の逸話を比較検討し、いくつかの逸話の持つ文化的・時代的背景とその意義を探ってみたい。

三、後世の伝記資料に見る李通玄のイメージ

今回検討する伝記資料に登場する事実関係や逸話は次の通りである。逸話の項目①～⑨は『決疑論序』記載のもの、⑩～⑳が『決疑論序』にはなく、『事迹』が記すものである。

- ① 出自・出身地（『決疑論序』は皇枝とし、北京⇨太原出身とする。
- 『事迹』は滄州出身とする）
- ② 思想・学識（智慧明簡、学非常師）、「影響文殊普賢之幻有」など
- ③ 儒教との関係（『周易』に精通したが、四十過ぎから外書を読まず）
- ④ 山林居住（市街を避けて山野に遊んだこと）
- ⑤ 華嚴経と造論の理由（新訳の八十卷華嚴経を得て、『新論』『決疑論』『十明論』などを執筆）
- ⑥ 著作の列挙（脚注『決疑論序』本文参照）
- ⑦ 没年・年齢等への言及
- ⑧ 臨終の様子1（村人・鳥獸の悲嘆）
- ⑨ 臨終の様子2（頂きより白光が出て、山林震驚）

資料 2 : 伝記資料と逸話

伝記資料	逸話																			
	① 出自	② 字職	③ 儒教精通	④ 山林閑居	⑤ 造論理由	⑥ 著作	⑦ 没年	⑧ 臨終嘆	⑨ 臨終奇蹟	⑩ 旅の経歴	⑪ 菓山菓餅	⑫ 禪定実修	⑬ 虎と遭遇	⑭ 泉出現	⑮ 口中白光	⑯ 二女子	⑰ 容貌	⑱ 村人对話	⑲ 坐化	⑳ 埋葬奇蹟
1 決疑論序	●	●	●	●	●	●	●	●	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
2 李長者事迹	●	●	×	●	×	●	●	×	×	●	×	●	×	●	×	×	×	×	×	×
3 華嚴経合論序 (志尊)	●	●	×	×	×	●	×	×	×	●	×	●	×	×	×	×	×	×	×	×
4 神祖山寺靈跡記	●	●	×	×	×	●	●	●	●	×	×	●	×	×	×	×	×	×	×	●
5 華嚴経合論序 (慧研)	●	●	×	×	×	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
6 宋高僧伝 卷 22	●	×	●	●	●	●	●	×	●	●	●	●	●	●	●	●	×	●	●	●
7 決疑論後記	●	●	×	×	×	×	●	●	●	●	×	●	●	●	●	●	×	×	×	×
8 李長者行蹟記	●	×	×	●	×	●	●	×	×	●	●	●	●	●	●	●	×	●	●	×
9 隆興仏教編年通論巻 16	●	×	●	●	×	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	×
10 歴代編年釈氏通鑑 巻 9	●	×	×	×	×	●	●	×	×	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
11 嘉泰普燈録 巻 24	●	●	×	×	×	●	●	●	●	●	×	●	●	●	●	●	×	×	×	×
12 李通文長者行状	●	●	×	×	×	●	●	×	×	●	●	●	●	●	●	●	×	●	●	●
13 仏祖統紀 巻 40	×	×	×	×	×	●	●	×	●	●	×	●	●	×	×	●	×	×	●	×
14 仏祖歴代通載 巻 13	●	×	×	●	×	●	●	●	×	●	●	●	●	×	×	●	●	●	●	×
15 釋氏稽古略 巻 3	●	×	×	×	×	●	●	×	×	●	×	●	●	×	×	●	×	×	×	×
16 仏法金湯篇 巻 8	●	×	×	●	×	●	●	×	×	●	×	●	●	×	×	●	×	×	●	×
17 神僧伝 巻 7	●	×	×	●	×	●	●	×	×	●	×	●	●	×	×	●	×	×	●	●
18 華嚴合論要後序	●	×	×	×	×	●	●	●	●	●	●	●	●	×	×	●	●	●	●	×
19 華嚴経感応略記	×	×	×	×	×	×	●	×	×	●	×	●	●	×	×	●	×	×	×	×
20 李長者見理授道伝	×	×	×	×	△	×	●	×	×	△	×	●	●	×	×	●	×	×	●	×
21 三教源流搜神大全 巻 6	●	×	×	●	×	×	●	×	●	●	×	●	●	×	×	●	●	●	●	●
22 居士分燈録 巻上	●	×	×	×	×	×	●	●	●	●	×	●	●	×	×	●	●	●	●	×
23 仏祖綱目 巻 31	×	×	×	×	×	●	×	×	×	●	×	●	●	×	×	●	×	×	×	×
24 華嚴経持驗記	×	×	×	×	×	●	×	×	×	●	×	●	●	×	×	●	×	×	×	×
25 居士伝 巻 15	●	●	●	●	△	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	×
26 奉陽縣志 巻 12	●	×	×	●	×	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	●	×	×	×	×
27 奉陽縣志 巻 13	●	×	×	×	×	×	●	×	×	×	×	×	×	×	×	●	×	×	×	×
28 華嚴経感応縁起伝	×	×	×	×	×	●	×	×	×	●	×	●	●	×	×	●	×	×	×	×

* 重複等のため資料 1 から一部の資料を削除した △は『決疑論序』『事迹』にない五台山訪問の逸話を載せることを示す

⑩経歴（居所を転々とした経過）

⑪棗と柏葉餅を食したこと

⑫禅定の実修（『事迹』は「端居冥黙」したとする）

⑬虎と遭遇（馴伏して土龕へ案内させたこと）

⑭嵐の夜に土龕前に泉が出現したこと

⑮口から白光を出して灯明に代えたこと

⑯二女子が現れて給仕したこと

⑰容貌（身長七尺二寸、広眉朗目など）

⑱村人との対話（死期をさとして別れを告げたことなど）

⑲坐化したこと

⑳埋葬と奇瑞（土龕を蛇が守っていたこと／二鶴・二鹿の出現／鳥獣の悲嘆など）

『決疑論序』『事迹』以下、各伝記資料に所載の逸話を別表に示した（「資料2 伝記資料と逸話」参照。表の中の●×は同類の逸話の記載の有無を示す）。これを見ると、『決疑論序』の記述があまり後世の伝記資料に継承されていないことがわかる。特に李通玄を「孔老」ではなく維摩詰になぞらえ、文殊・普賢の化身だという『決疑論序』の李通玄像の重要な要素や、華嚴経の釈論を著した動機などが落ちている場合が多い。また、臨終の際に山林が震動し鳥獣が悲嘆したことは比較的多くの資料が載せるが、内容的には白鶴と鹿を登場させた『事迹』の埋葬の場面における描写がより多く継承されている。

三一、「口出白光」・「二女子給仕」の逸話

次に、いくつかの逸話を取りあげ、そこから見えてくる李通玄のイメージについて考察を加える（出自・著作・卒年など史実については検討しない）。

・（口から白光を出す逸話）

伝記的記述が短い志寧の『合論序』や『寿陽縣志』所載の伝などを除いて、すべての伝記資料が載せるのが次の逸話である。『事迹』は言う。

長者、論を製するの夕、心は玄奥を窮め、口は白光を出して龕中を照耀す。以て燈燭に代へる。²⁰

これは、華嚴経の釈論執筆のために神福山の土龕に至った李通玄が、灯明がなかったために口から白い光を放ったという逸話である。のちに見るように、『三教源流搜神大全』所載の李通玄の肖像画（「資料3 通玄禅師像」参照）の中で、顔の横あたりに何やら煙か炎のようなものが浮遊しているのがそれだろう。

この怪異の現象について洪氏は「華嚴経」中の仏菩薩が自身の体の各所から光を放つのに呼応する」と指摘している。李通玄の華嚴思想において仏の光明が重要な要素であることを考えれば興味深い指摘である。²¹ 実際、僧伝などには華嚴経に有縁の者が口より光を放つ逸話は多い。『華嚴経感応伝』は杜順に師事したという居士・樊玄智が口より光明を放ち四十余里に及んだとし、『宋高僧伝』には華嚴経を誦しながら口の両角から強烈な金色の光を放った僧について記し（同

伝では李通玄も「口の両角より、白光を出す」とする)、さらに『釈氏通鑑』は法蔵も華嚴経の講説中に口より白光を発したとする²²⁾。

だが、類似の逸話は華嚴経と無関係にも語られる。法華経を説誦した法誠が臨終に当たり口より光明を出して室内を照らした話。智顛の法系の法盛が説法中に口より光明を出して大衆の信仰を集めた話。そして善導の説法を聞いて庭の木より投身したことで有名な浄土教信者も、念仏しながら口から光明を出したとされるなど、枚挙に暇がない²³⁾。李通玄の場合も華嚴経的な奇瑞というより、むしろ仏法(あるいは禅定や説誦、念仏などの「行」)の奇特を物語る例の一つとすべきだろう。それは次に見る逸話と合わせて考えるとき、整合性をもつてくるはずである。

・〔絶世の美女二人による給仕の逸話〕

『事迹』には、李通玄が神福山の土龕で執筆を始めた時に、「忽ち二女子有り、容華絶世、皆笄年ばかりなり」と、どこからともなく容姿端麗な十五歳ほどの「女子」二人が現れ、食事、香、紙筆などを日々欠かさずに供して給仕し、執筆終了と共に忽然と消えたという不思議な逸話がある。『合論序(志寧著)』『神福山寺靈跡記』『決疑論後記』『嘉泰普燈録』のように二人の女性を「天人」または「天女」とするものも多い(『合論序(慧研著)』『李通玄長者行状』『李長者見聖授道伝』などは「天童」「仙童」などとする)。「事迹」は、この李通玄の感通は仏駄跋陀羅が六十卷華嚴経を訳出していた時に、「青衣の童子」二人が庭の池より忽然と現れては給仕し、訳了とともに消えた

故事に符合すると記している²⁵⁾。

この逸話についても洪氏は、疑いなく仏教と中国華嚴における李通玄の地位を高めるもので、李通玄の著作を仏駄跋陀羅の訳経と同等に評価するものだという²⁶⁾。「青衣の二童子」に関しては、『宋高僧伝』に興味深い逸話がある。五台山を訪れた法照が、澗(谷川)の水辺で出会った「八、九歳の青衣」二人に案内され、普賢・文殊の両菩薩が居る竹林寺で念仏の法門を授かったという。華嚴経に有縁の霊場である五台山といい、普賢・文殊といい、明らかに華嚴経と結びついている。しかし、『事迹』より後代の李通玄の伝記資料は、仏駄跋陀羅と「青衣の二童子」の逸話には言及しない。華嚴思想の系譜の中で李通玄に権威を与える目的ならば、当然言及するはずである(「青衣の童子」の話は『高僧伝』の仏駄跋陀羅伝には見えず、万人周知の故事とは言えそうもないからだ)。また、「青衣の二童子」とはいわば召使いの少年たちで、「容華絶世」の美女二人とはイメージが大きく異なると言うべきである。

一方、『統高僧伝』には「二青衣女子」に関する逸話がある。山水が枯れ妖鬼が跋扈して住人が難渋していたところ、慧約なる僧が呼ばれて行くと、「二青衣女子、澗水より出で、宿世の障りにより「水精」に墮しているのだと打ち明ける。慧約が戒を授けると「怪災は永く絶えた」という²⁸⁾。この慧約は後に梁の武帝に授戒し国師となった人物だが、禅と経の説誦を楽しみ、その室には異香があり、猛獣を道で馴らし、金華山に入っては桔(「キキョウの根か?」)を採取して松林や谷川に遊んだ。葬儀の日には一組の白鶴が墓の上を巡って哀しげに鳴い

たという。²⁹⁾

これらの逸話からすると、「青衣の女子（または童子）」は「澗（谷川）」に係した神異または怪異の存在であり、中国の一般の人々にとつては、仏跋陀羅の故事よりもそうした俗信との関係が思い浮かんだのではないだろうか。慧約の伝記には山林での生活や猛獣を馴らす話、白鶴などが登場し、その仙人めいたイメージは『事迹』を初めとする伝記資料に見える李通玄の人物像と共通する要素も多い。したがって「容華絶世」の「二女子」の逸話は、伝記資料によつては「天人」「天女」「女童」「童子」「仙童」などとされることや、口から白光を吐くという逸話が神異の僧たちの伝記に見られることも考え合わせると、いわば神仙的な神秘の世界の聖人のイメージを形作るのに寄与しているのではないだろうか。

一方、民間信仰的な背景を持つ「二女子」の逸話が李通玄の伝記資料の中で脈々と語り継がれたことは、李通玄の人柄とも関連しているとも考えられる。山深き土龕で禅定と執筆に没頭する神異の聖者のような李通玄は、ひよいと村人の前に現れては人々と語り、やさしい言葉を掛けては山へ帰っていく——そんな民話の一シーンのような情景が、『事迹』が伝える臨終前の逸話から思い浮かぶ。李通玄は山辺の草地で会食していた村人たちに歩み寄り、「あなたがたは達者で暮らさない。私はそろそろ帰ろうと思う」と、みづからの死期を予告した。故郷へ帰るのだと思つた村人たちが名残惜しんで慰留すると、李通玄は「たとえ百年生きたとしても必ず帰り去るものなのだ」「去住は常然たるのみ」と言う。そして山の入り口まで見送つてきた村人た

ちに「そろそろ家に帰りなさい」と別れを告げて「嵐霧」の中に消えた。その翌日、李通玄は「姿容端儼としてすでに龕中に坐化³¹⁾」していたという。村人たちとの会話は後世の産物かもしれないが、李通玄の人となりの一端なりとも伝えていられると思われる。

三―二、虎の逸話と禪者

次に虎にまつわる逸話を見よう。李通玄が華嚴經の釈論を執筆するにふさわしい居所を探していたところ、虎に出会い、神福山の土龕へ案内されたというものだ。

忽ち一虎の塗^{なま}に當たりて馴伏し待つ所有るが如きに逢ふ。長者は之に語りて曰く、「吾、まさに論を著し華嚴經を釋せんとす。吾がために一棲止の處を擇ぶべし」。言ひ畢はりて虎起ち、長者ようやくにして之を撫で、遂に挈げる所の囊を將つて虎の背に掛け、其の止まる所に任す。是に於て虎は神福山原に望み、直下三十餘里のある土龕の前に當たり、便ち自ら蹲駐す。長者の旋く囊装を取めて龕内に置くや、虎は乃ち屢顧みつつ尾を受れて去る。³²⁾

この逸話も『決疑論序』を除けば慧研『合論序』以外の全伝記資料に見える。稲岡智賢氏は「たとえ後世の人々が託した通玄の人徳の象徴であるにしても、虎でなければならぬその必然性は一体何処にあるのか興味のあるところ」と疑問を呈している。³³⁾

ここで、虎にまつわる類似の逸話を探ってみよう。佐伯有清氏は各種高僧伝から、僧が虎を撫でて立ち去らせた逸話（『高僧伝』卷三―求那跋摩、卷九―耆域、『宋高僧伝』卷二―本淨）、虎が説法を聴い

た逸話(『高僧伝』巻二一―僧生、『続高僧伝』巻二五―僧林)などを挙げ、また猛虎を馴伏する逸話は『宋高僧伝』に数多くあるとして、七世紀半ばの惟寛(巻一〇)、八世紀の懐空(巻二九)と道悟(巻一〇)などの僧の例を挙げている。³⁴⁾

右の例のうち、晋代の耆域と劉宋の求那跋摩とは、中国における戒の確立に功あったインド僧だが、その他の伝記を見ると、僧生は山中で法華経を誦し禪定を修習し、僧林は山中の神祠に住んで「禪黙して日をかさねた」とされ、³⁵⁾唐代の本浄は「禪宗の知識が豊富」で「華嚴性海の法」を説いて晩年は鶴と化して飛び去ったという。³⁶⁾惟寛は止観を行い、道悟は馬祖道一と石頭希遷に参じた禪者である。³⁷⁾いずれも禪定の実践者であったことが知られる。

ほかに禪僧としては、八世紀前半、牛頭宗第六祖惠忠などの例もある。惠忠の山林の居室近くには虎や鹿がやって来て子を産んだ。ある日、道をふさいで咆哮する猛虎を諭すと合掌礼拝して去ったという。この惠忠は身の丈七尺、肌は金色、年中衣一枚で通したというから、どこか李通玄の風貌を思わせる。また、唐代に寒山・拾得と同時期に天台山国清寺にいた封干(やはり身長七尺余り)は虎に乗って寺に戻ってきたことがあるという。³⁸⁾

これらを見ると、李通玄の伝記資料における虎の逸話は禪者的なイメージを強く喚起させるものと言える。『事迹』は李通玄が十年間「端居宴黙」したとし、その最期は「姿容端儼」として「龕中に坐化」したという。⁴⁰⁾この「坐化」という極めて禪宗的な用語は『李長者行蹟記』『仏法金湯篇』にも見られ、『李長者見聖授道伝』は「禪寂」とす

る。⁴¹⁾そして臨終や埋葬の場面では、仙人のイメージに関連しながらも禪者の伝記にも見える白鶴や鹿が登場するのは先述のとおりである。

三一三、『三教源流搜神大全』と李通玄像

最後に着目したのは明末に成立、刊行されたと推定されている『三教源流搜神大全』である。⁴²⁾この書は儒仏道三教の神々の伝記と肖像画の集成で、いわば「中国の神々の百科事典」。「通俗的な神仏の事典として最も流行したもの」で、民間信仰の神々も多く採録し、「当世における神の信仰状況を示す資料として非常に重要なもの」だとされている。⁴³⁾道教の神々に加え、『神僧伝』から仏教僧(禪師)の伝記二一件が採録されている。ただし慧遠、鳩摩羅什、仏駄跋陀羅、玄奘、一行、金剛智らを載せ、道安や法顯らを載せないなど、禪師の選択の基準は判然とせず、内容的にも『神僧伝』からの引用に留まり独自性に乏しいとの評もある。⁴⁴⁾確かに李通玄伝も『神僧伝』をやや簡略にしただけで、伝記的な内容面では独自性に乏しい。むしろ『神僧伝』では最後に「葬日、二班鹿、雙白鶴有り、雜類鳥獸は悲戀の状のごとし」と、斑の鹿と白鶴のつがいの出現や、鳥獸の悲嘆の描写があるが、この資料はそのいかにも神僧らしい最期の場面を割愛し、返って興を削いでいるほどである。ただし、「古今に該博、儒釋に洞精す」として、三教一致を宣揚する『三教源流搜神大全』の列伝にふさわしい記述が見られる。⁴⁵⁾荒木見悟氏は「採用された華嚴系の人物は通玄禪師のみである。このことは通玄信仰が三教一致論者の間にまで行き渡っていたことを示すものであろう」と指摘している。⁴⁷⁾

この資料で注目したいのは、李通玄の肖像画である(資料3)。全
くの想像図だとはいえ、当時の人々が抱いていたイメージがうかがえ
る。屋敷の中庭のような場所であるのが不可解だが、岩のようなもの
に坐し、口の両角より小さな炎のようなものが放出されている。これ
は「口は白光を出し」という光だろう。さらに、わずかな頭髮や鬚や
眉は縮れ毛のようで奇妙だが、右旋した螺旋のようにも見える。稚拙
な描写とはいえ、李通玄の逸話に基づいて神異の相を表そうとしたも
のだろう。

ここで、李通玄の著作の流布を通して、その思想が後代どのように
受容されたかを振り返りたい。木村清孝氏も荒木見悟氏も、李通玄の
著作と思想が宋代から明代にかけて、主として禅者の間で歓迎され、
評価されたことを指摘している。⁴⁸ また、木村氏は一六世紀の異端の儒
者・李贄(卓吾)が李通玄の『新華嚴経論』を抜粋して『華嚴経合論
簡要』を著したことに論及している。⁴⁹

一方、小島岱山氏は、李通玄の華嚴思想は『老子』『周易』を大々
的に取り入れたもので、「老易一致の華嚴思想として把握できる」と
指摘する。そして華嚴思想を中国化・民衆化したところに李通玄の
特徴があるとし、その証左として、(李通玄が暮らし、亡くなった)
「寿陽の方山には李通玄を仏菩薩の如く慕う多くの民衆によって建立
された、唐代末から清代に至るまでの数多くの石碑が今もなお存在し
ている」と現地踏査の結果を報告している。⁵⁰

李通玄の弟子であった比丘照明は『決疑論序』のなかで、李通玄を
积尊や維摩詰になぞらえて描いていた。それは天竺の智者といったイ

メージを喚起するものである。根本智・空慧を根幹とする透徹した理
智で仏法をとらえた李通玄は、当時の知識人一般とは異なり、どこか
中国人離れた異人的な居士であったのかもしれない。しかし各種伝
記資料からは、比丘照明の思いとは徐々にずれを生じながら、むしろ
李通玄の中国的な側面が人々に受け容れられ、強調されていったこと
がうかがえる。特に『宋高僧伝』以降は、もっぱら神異譚的な逸話を
中心に、中国的な神仙や禅者のイメージで李通玄の生涯が描かれてい
る。李通玄に対する人々のイメージと思慕の仕方も中国化・民衆化し
ていったと言える。また、安史の乱以降の唐代から宋代以降、一貫
して中国仏教の巨大な潮流であり続けた禅宗の文化は(その担い手に
は多くの居士もいた)、虎や鶴といった中国的な道具立てを好んだ。
おそらくそれは早くも『事迹』の記述に影響したと思われる。そして
後代の伝記資料にそうした禅者的なイメージが継承されたことも、李
通玄の神仙的なイメージとあいまって、中国の人々が李通玄に敬愛の
念を抱く大きな要因となったのではないだろうか。こうした李通玄の
イメージの変容は、「民衆との結びつき、各宗派の合一、三教融合の
傾向や居士仏教の様子が強い」とされる宋から明にかけての仏教の展
開とも軌を一にしていると言えるだろう。



資料3：通玄禪師像
(『三教源流搜神大全』内閣文庫本)

四、まとめ―時代の中の李通玄のイメージ

以上の考察から、下記の点を指摘することができるだろう。

第一に、李通玄が生きた時代に最も近い、現存最古の伝記資料である『決疑論序』については、そこに記された神異譚的でない部分（四十代から仏教書以外を読まなかったこと、華嚴経の釈論執筆の動機、孔老ではなく維摩詰の後継者というイメージなど）や、華嚴の聖者（文殊・普賢の化身）のイメージは、ほとんど後代に継承されなかった。

一方『事迹』は、李通玄の著作を「毘盧之旨帰・華嚴之日月」と評し、仏駄跋陀羅に言及するなど、李通玄を華嚴の聖者とする一面もある。この点、『決疑論序』の李通玄像に近い部分を残しているが、『事迹』の最大の特徴は神異・靈驗譚的な逸話を豊富に打ち出した点である。異様な風貌で菓と柏葉餅を食い、口から光を出し、謎の美女に給仕される逸話や、虎、冥黙、坐化など禅者の、超俗的なイメージの逸話である。そして『宋高僧伝』より以降は、もっぱらそうした逸話が好んで継承され、「二女子」が「天女」や「天人」とされるなど神仙的イメージの増広も見られると同時に、神異の禅者のイメージも定着していった。

第三に、神仙的な居士・聖人と、神異の禅者といった、李通玄の二重のイメージは、唐代以来の禅の流行、宋代以降の居士仏教の発展、三教一致的な民衆信仰という時代背景と共に形成され、また、それゆえに時代と遊離せずに継承され続ける力を持ち得たものと考えられる。

それだからこそ、『神福山寺靈跡記』などの民間人による石刻史料、『仏祖歴代通載』『仏法金湯篇』『仏祖綱目』など禅僧による僧伝、『神僧伝』『華嚴経持験記』『居士伝』など靈驗記や居士に関する伝記などにも、幅広く李通玄の事績が採録され続けたのだと言えるだろう。

こうした伝記資料に見える李通玄のイメージは、人々が求めた李通玄像を伝えるものである。しかしその一方で、李通玄その人と彼の思想に、人々の思いに応える要素があったことも示しているのではないだろうか。李通玄が合わせ持っていた多彩で多面的な「顔」こそが、種々の興味深い逸話を生む素地となっていたはずである。明末に編纂され、清末に再発見されて新たに刊行された『三教源流搜神大全』に、華嚴系の人物として唯一人李通玄が採録されたことは、象徴的な出来事であろう。この書物に「神」の一人として掲げられた「通玄禅師」の神異な風貌の絵図には、遙かな時代を隔てて、李通玄の実像が象徴的に凝縮されているように思えるのである。

〔注〕

- (1) 『新華嚴経論』『略积新華嚴経修行次第決疑論』『解迷顕智成悲十明論』『大方広仏華嚴経中巻大意略叙』（『新論』『決疑論』『十明論』『略叙』と略記）の著作がある（大正三六、四五）。
- (2) 李通玄の思想の流布や受容については木村「二九八〇」、荒木「一九九三」、小島岱山氏の諸論考、柴崎昭和氏の明恵に関する研究、中島志郎氏の知訥に関する諸論考などがある。
- (3) 湯次「一九一五」八一―八三頁
- (4) 高峯「一九四二」二〇〇―二〇一頁
- (5) 稲岡「一九八一」三五頁

- (6) 木村「一九九二」一六五—一六九頁
- (7) 邱「一九九六」四—九頁。この点は洪論文でも指摘されている(洪「二〇一〇」一八三頁 原文は中文、以下同様)。
- (8) 小島「一九九七B」。同論文「第一章 李通玄の伝記と著作」参照。
『李通玄長者行状』については同、第一分冊九頁。
- (9) 洪「前掲」一八四、一八九、一九三、一九六頁
- (10) 荒木「前掲」一四七頁
- (11) 稲岡氏は今回の一覽表の資料の内、九、一〇、一二、一三、二四、二六、三〇を除く資料に加え、孟縣志卷一八、平定州人物志下、山西通志卷五七の合計二七種を挙げる(稲岡「前掲」三六頁注①)。また、表中の一三、二六は洪「前掲」一八二—一八三頁、二四は荒木「前掲」一四七頁、一〇、一二、三〇は小島「前掲」第一分冊七、一三、一九頁による。小島氏はこのほか数点に加え、地方志等所収の断片的資料も多数挙げて検討している。なお、『李長者行蹟記』については、稲岡氏は『金石統編』卷一七を挙げるが、今回は同文であると氏が指摘する『山右石刻叢編』卷一六「所収のものを用いた」。
- (12) 小島氏が『事迹』以前の成立と推定する『李通玄長者行状』を見ると、『事迹』と比しても素朴で、興味深い相違点もある。しかし今回は小島「一九九七B」の書籍化を待つこととし、本論では『李通玄長者行状』の内容はじめ、右の論文における小島氏独自の見解に関わる点については論じること控えたい。
- (13) 華嚴經決疑論序 東方山逝多林寺比丘照明撰
北京李長者皇枝也。諱通玄。性稟天聰、智慧明簡。學非常師。事不可測。留情易道、妙盡精微。放曠林泉、遠於城市。實曰王孫。有同捨國。年過四十絕覽外書。在則天朝即傾心華嚴經、尋諸古德義疏、掩卷歎曰。經文浩博。義疏多家。惜哉後學、尋文不暇、豈更修行。幸會華嚴新譯義理圓備。遂考經八十卷搜括微旨、開點義門。上下科節、成四十卷華嚴新論。猶慮時俗機淺、又釋決疑論四卷。又略釋一卷。又釋解迷顯智成悲十明論一卷。至於十玄六相、百門義海、普賢行門、華嚴觀、及諸詩賦、並傳於世。恐寒暑遷謝、代變風移、略敘
- 見聞傳知己。起自開元七年、遊東方山、隱淪述論。終在開元十八年三月二十八日卒。時夜半山林震驚、群鳥亂鳴、百獸奔走。白光從頂而出、直上衝天。在於右近道俗無不哀嗟。識者議曰。惟西域淨名遍行是其流。此方孔老非其類。影響文殊普賢之幻有也。照明親承訓授、屢得旨。蒙、見其終。嗟夫聖人去世。思想不及。時因訪道君子、詢余先聖之始末。不敢不言。謹序之。
- 爾時大曆庚戌秋七月八日述 (大正三六、一〇—一一下。なお、句読点は適宜振り直した)
- (14) 釈尊のイメージについては小島氏も指摘している(小島「前掲」九〇頁)。
- (15) 新纂統蔵四、七上—八上
- (16) 『仏祖統記』大正四九、三三三下。『釈氏稽古略』同、八二六下。『仏法金湯編』新纂統蔵八七、四〇三下。『李長者見聖授道伝』清凉山志卷四、一〇頁(刊本一九二頁)。「仏祖綱目」新纂統蔵八四、六一八上。
- (17) 吉津宜英氏は李通玄の「自心是佛」「自心作佛」といった言辞を洪州禅の「即心是佛」に通じるものとして、李通玄をある種の禅者と見ることができるとする(吉津「一九八五」一八六—一八七頁)。また、小島岱山氏も李通玄の思想の禅宗各派への影響をしばしば論じている(小島「一九八四」四一二頁上など)。
- (18) 鶴も禅僧の伝記に登場することがある。牛頭宗の僧惠忠は『宋高僧伝』卷一九によれば身の丈は七尺を越え、臨終の際に「鳥獸哀鳴」したとされ、李通玄の伝記に近いものがある。出棺の折りには「群鶴有り、輿の上を徘徊」したという(大正五〇、八三五—一上)。
- (19) 洪「前掲」一九三、一九六頁
- (20) 長者、製論之夕、心窮玄奧、口出白光照耀龕中。以代燈燭。(新纂統蔵四、七上—中)
- (21) 洪「前掲」一九〇頁。光明については小島「一九八八」参照。
- (22) 樊玄智は『大方広仏華嚴經感応伝』(大正五一、一七四中)。法蔵は『歴代編年釈氏通鑑』卷八(新纂統蔵七六、九二中)。李通玄は「於

- (23) 『口兩角出白光』、『宋高僧伝』卷二二(大正五〇、八五三下)。
 『統高僧伝』卷二八(大正五〇、六八九中)、『仏祖統記』卷九(大正四九、一九九下)、『仏祖綱目』卷二九(新纂統藏経八五、六〇九下)忽有二女子、容華絶世、皆可笄年。(新纂統藏四、七中)。「笄年」は女子の成年の年齢で、木村清孝氏が一五歳ほどとするのに従う(木村「一九九二」一六七頁)。
- (25) 『華嚴経伝記』卷一(大正五一、一五四下)
- (26) 洪「前掲」一九〇頁
- (27) 『宋高僧伝』卷二二(大正五〇、八四四上一下)
- (28) 『統高僧伝』卷六(同右、四六九上)
- (29) 同右、四六九上—中、四七〇上。略歴については『中国仏教史辞典』(鎌田茂雄編、東京堂出版)も参照した。
- (30) 汝等好住。吾将欲帰。縦在百年会当帰去。去住常然耳。汝等各還家。(新纂統藏四、七中)
- (31) 姿容端儼已坐化於龕中(同右)
- (32) 忽逢一虎當塗馴伏如有所待。長者語之曰、吾、將著論釋華嚴經。可與吾擇一棲止處。言畢虎起、長者徐而撫之、遂將所挈之囊挂于虎背、任其所止。於是虎望神福山原、直下三十餘里當一土龕前、便自蹲駐。長者旋收囊裝置於龕内、虎乃屢顧妥尾而去。(同右、七上)
- (33) 稲岡「前掲」三三頁
- (34) 佐伯「二〇〇二」四一五頁
- (35) 『高僧伝』卷二二(大正五〇、四〇六下—四〇七上)、『統高僧伝』(同、六四六中)
- (36) 『宋高僧伝』卷二二(大正五〇、八四七下—八四八上)
- (37) 惟寛—『宋高僧伝』卷一〇(大正五〇、七六八上)、懐空—卷二九(同上、八九二下)、道悟—卷一〇(同上、七六九中)
- (38) 同右 卷一九(同右、八三四下—八三五中)。坐化した際には白い虹が東西の山を貫き風雨が荒れ、鳥獸の哀しい鳴き声が数日間やまなかつたともいう。
- (39) 同右、八三一—中

- (40) 『事迹』(新纂統藏四、七上—中)
- (41) 「坐亡」とする伝記資料もある。『宋高僧伝』のほか『仏祖統記』『神僧伝』、『三教源流搜神大全』。なお、「坐亡」とは『莊子』の「坐忘」と同義で、本来は端座し雑念を払うことを言い、禪宗でも同様に使用される(中村元『佛教語大辞典』)。しかし右の諸資料では明らかに「坐化」の意味で使用されている。唯一の例外は張商英の『決疑論後記』で、李通玄が長く禪定を修習したことを「坐亡」としている(大正三六、一〇四九上)。
- (42) 清末の刊本を使った上海古籍出版社の影印本が状態もよく見やすいが、「資料3」には内閣文庫所蔵の明刊本を使った(この刊本は『三教搜神大全』と題されている)。李通玄伝はどちらも同じだが、ほかの神々では清刊本は欠落があり、史料としては明刊本が優れているとされている(増尾伸一郎・丸山宏「二〇〇二」二七一頁)。
- (43) 増尾・丸山「前掲」二六二頁、林「二〇〇七」二頁、酒井「一九九九」三五四頁、二階堂「二〇〇六」四九頁
- (44) 二階堂「前掲」六七頁
- (45) 葬日、有二班鹿雙白鶴雜類鳥獸、若悲戀之状焉。(大正五〇、九九五中)
- (46) 『神僧伝』(大正五〇、九九五上)、『絵図三教源流搜神大全』二八五頁。直接には『神僧伝』を承けた記述だが、その『神僧伝』の典拠は『宋高僧伝』と思われる。『宋伝』はこのように「決疑論序」にあつて『事迹』にない記述も拾っている。
- (47) 荒木「前掲」一四七上。なお、『神僧伝』には杜順(大正五〇、九八四下)と澄観(同、一〇〇四中)の伝記がある。
- (48) 木村「一九八〇」四九頁上、荒木「前掲」一四〇頁下、一四二下
- (49) 木村「同右」四九頁下—五〇頁下。なお、『華嚴経合論簡要』の巻頭には「合論序」と共に、『事迹』を載せている。李通玄死後にその著作が流布したことを語る末尾の部分に若干の省略が見られる以外は全く『事迹』のままなので、今回は伝記資料一覧(資料1)に挙げるに留め、逸話の比較の表(資料2)では割愛した。

(50) 小島「一九九七」二五八頁上、小島「一九九一」一一二四頁。それらの碑文や詩の一部は『寿陽縣志』巻一二にも採録されており、方山の幽玄な山景と共に李通玄の伝記に出る虎や天女、泉に言及するなど、後代の人々が李通玄を敬慕していた様子がうかがえる。

(51) 酒井「前掲」三五〇頁
(52) 二階堂「前掲」五一頁

〔引用文献〕

〔著作〕

木村清孝「一九九二」『中国華嚴思想史』(平楽寺書店)
酒井忠夫「一九九九」『増補 中国善書の研究 上』

(酒井忠夫著作集一、国書刊行会)
高峯了州「一九四二」『華嚴思想史』(百華苑)(一九六三改訂二刷)
二階堂義弘「二〇〇六」『道教・民間信仰における元帥神の変容』

(関西大学東西学術研究所研究叢刊二七、関西大学出版部)
湯次了栄「一九一五」『華嚴大系』(法林館)

吉津宜英「一九八五」『華嚴禪の思想史的研究』

(学術叢書・禅仏教 大東出版社)

〔論文〕

荒木見悟「一九九三」『明代における李通玄』(日本中國學會報 第四五集)
稲岡智賢「一九八一」『李通玄の伝記について』(仏教学セミナー三四)

木村清孝「一九八〇」『李通玄思想の流布について』(印佛研二九(一一))
邱高興「一九九六」『李通玄佛學思想述評論』

(『中国佛教學術論典九』佛光山文教基金會刊所収。※中文)
洪梅珍「二〇一〇」『李通玄傳記史料之比較分析』

(『大專學生佛學論文集』華嚴蓮社刊所収。※中文)
小島岱山「一九八八」『李通玄における光明思想の展開』

(華嚴学研究第二号)

〔一九九二〕「五台山系華嚴思想の特質と展開」(同右 第三号)
〔一九九七〕「李通玄における老易徹一致の華嚴思想とその影響」(印佛研四五(一一))
〔一九九七B〕博士論文「李通玄の基礎的研究」

(学位授与大学・東京大学、国立国会図書館所蔵)
佐伯有清「二〇〇二」『中国古代の高僧と虎の説話』(東方二五九号)

林桂如「二〇〇七」『余象斗の華光大帝描写をめぐって』
(東京大学中国語中国文学研究室 紀要第一〇号)

(いとう まこと 文学研究科仏教学専攻博士後期課程)

(指導教員・小野田 俊蔵 教授)

二〇一一年九月三十日受理